

E S D研修旅行で学んだことを生かした授業実践報告

広島大学附属小学校 教諭 沖西啓子

(1) 研修旅行の目的

アンネ・フランクの家・ダッハウ強制収容所を実際に見学する活動を通して、戦争の悲惨さや平和の大切さを学び、それを小学校社会科の授業実践に生かす。

(2) 研修内容

1) アンネ・フランクの家

アンネが 1942 年から 1944 年まで住んでいた隠れ家をミュージアムとして公開している。ここにはアンネが隠れ家で書いた日記の原本が展示されており、どのように隠れ住んでいたかなどの説明があった。

2) ダッハウ強制収容所

ダッハウ強制収容所はドイツ国内に設置された最初の強制収容所で、当時の収容所での生活などをパネル展示してあった。収容所での衛生状態は劣悪で、飢えやチフスといった病気で命を落とす人も少なくなかった。また同じ敷地内にある収容バラックや火葬場の見学もした。連行された囚人の様々な宗教のために礼拝堂が 4 つあった。

(3) 研修成果と課題

アンネ・フランクの家、ダッハウ強制収容所どちらも教材としての価値は非常に高いと考えた。アンネ・フランクの家は想像以上に狭い空間に家族で 2 年も暮らしていたことに驚かされた。それでも希望を失わずに、日記に自分の心の思いを書き続けたアンネの精神力の強さに驚かされた。そんなアンネを支えた両親や姉・マルゴの存在は大きい。ダッハウ強制収容所では、戦争という心理的に追い込まれた状況の中で、人間の集団心理の異常さ・恐ろしさを感じた。ほんの 70 年前に起こった恐ろしいできごとを後世に伝えることで、二度と同じことを繰り返してはいけないと強く感じた。しかし、日本史しか学習しない小学校段階では、ダッハウ強制収容所は教材化することは難しいと考え、アンネ・フランクを教材として取り上げた単元を開発し、授業実践することにした。

(4) 研修から学んだ授業実践

1) 目標 フロイド・シュモーやアンネ・フランクの生き方から、戦争の恐ろしさや平和の大切さを学ぶとともに、世界の平和のために自分にできることを考える。

2) 実施学年・教科 広島大学附属小学校第 4 学年・社会科

3) 単元計画

- 第一次 広島復興を支えたフロイド・シュモーの生き方を知る。
- 第二次 最後まで希望を失わなかったアンネ・フランクの生き方を知る。
- 第三次 フロイド・シュモーとアンネ・フランクの共通点を見い出す。
- 第四次 二人の生き方から、世界の平和のために自分にできることを考える。

4) 成果と課題

原爆の被害を受けた広島に来て、20軒以上の家建てたフロイド・シュモーが遺した言葉と、アンネ・フランクが日記に書き遺した言葉を読み、二人の共通点考えた。人種も性別も年齢も宗教も違う二人であるが、児童は、二人とも世界が平和になりみんなが幸せに暮らせる世の中を望んでいたことや、自分にできることをしようとしたことが共通していることに気づくことができた(下図に児童の意見を掲載)。

(5) ESDに関する今後の取り組み

研修旅行で学んだ戦争の悲惨さ、平和の大切さを生かし、今回はESDの中でも平和を意識した国際理解教育に絞って授業開発した。世界の平和について考えさせる授業は、今後も学習材や視点を変えて実践していく必要がある。そのような授業を積み重ねていくことで、人種や宗教、価値観などを超えて世界の人々が協力し行動できる子どもの育成を目指したい。

ESD研修旅行では、持続可能な都市開発を進めているミュンヘンのリーム地区の見学もした。広島市の郊外住宅地での空き家問題と比較し、今後の対策を考えさせる授業を開発することができると考えている。また、現在はESDの中の防災学習に焦点を当て、授業開発をしている段階である。

(フロイド・シュモーとアンネ・フランクの共通点について)

◦二人とも世界が平和に幸せになることを願っていた。 ◦みんなのために、みんなの役に立ちたいという思いがあった。 ◦自分の能力を世界のためにいかしていきたいという気持ちを持っていた。	◦皆同じ人間だから戦争をせず、幸せになってほしいと思っているところ。 ◦みんなの役に立って、人々に喜びを与えたいと思っているところ。 ◦自分の能力をありがたく思っているところ。
◦二人ともた「何かの役に立ちたい」と思いながら生きていた。 ◦みんなが幸せになれることを目的としていた。 ◦シュモーさんは家を建てる才能を、アンネ・フランクさんは文章を書くことの才能を持っていて、二人とも才能を生きさせようとしている。	シュモーさんもアンネ・フランクもどちらも殊口をねがっている。同じ意味の事を言っている。そして二人とも他の人の事も考えている。そして、他の人の役にたとうとしている。そして他の人を喜ばせたいという気持ちがある。